

日本独文学会
秋季研究発表会

2016年10月22日(土)・23日(日)

第1日 午前9時50分より

第2日 午前10時00分より

会場 関西大学千里山キャンパス
第1学舎5号館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
Tel. 06-6368-0548 (関西大学文学部工藤研究室)
E-Mail: yskudo@kansai-u.ac.jp

参加費：1,500円
(学生会員、常勤職のない会員は1,000円)

日本独文学会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-34-6 南大塚エースビル603
Tel/Fax: 03-5950-1147
E-Mail (メールフォーム): <http://www.jgg.jp/mailform/buero>

プログラム

第1日 10月22日(土)

開会の挨拶(9:50~9:55) A会場(E601教室)

阪神支部長 工藤 康弘
会 長 大宮勘一郎

シンポジウム I (10:00~13:00) A会場(E601教室)

〈プラハのドイツ語文学〉再考

Neue Perspektiven der Prager deutschsprachigen Literatur

司会: 三谷 研爾

1. マウトナーからカフカへ—多言語状況の痕跡 川島 隆
2. 世紀転換期プラハのユダヤ系ドイツ語メディア 中村 寿
3. カフカにみる「チェコ」文学との交点
—ニェムツォヴァーとランゲルを介して 阿部 賢一
4. ライネロヴァーとモニーコヴァーにみる〈プラハのドイツ語文学〉継受
島田 淳子

シンポジウム II (10:00~13:00) B会場(E602教室)

日本の大学におけるコミュニケーションなドイツ語の教科書

—教師・学習者・使用の実践から考える

Kommunikativ orientierte DaF-Lehrwerke an japanischen Universitäten

— Lehrende, Lernende und Unterricht

司会: 藤原三枝子

1. ドイツ語圏で出版された教科書に対する教員の意見と使用の問題
—アンケートの量的・質的分析結果を総合的に考える

Meinungen über im deutschsprachigen Raum erschienene Lehrwerke und Probleme bei deren Verwendung im Unterricht — Ergebnisse der quantitativen und qualitativen Analyse einer Umfrage unter DaF-Lehrenden in Japan

梶浦 直子・Elvira Bachmaier

2. コミュニカティブな教科書を用いたカリキュラムの事例
—教師と学習者への働きかけ 鷺巣由美子
3. コミュニカティブな教科書に対する学習者の認知
—学生の外国語学習観, 学習環境に対する認知から探る 藤原三枝子
4. 教師のビリーフ (信念) と授業実践
—コミュニケーション教科書を使用するドイツ語教師の視点から 森田 昌美

シンポジウム III (10:00~13:00) C 会場 (E603 教室)

聖と俗の *foi & triuwe*

—中世の宮廷文学における「誠実」・「忠誠」・「信心」

Das Heilige und das Profane im mittelalterlichen Treuebegriff

— *foi und triuwe* in der höfischen Literatur

司会: 渡邊 徳明

1. *triuwe* の語義について 嶋崎 啓
2. ゲネレンとクリエムヒルトの誠実なる裏切り
—彼らの悪魔的異形性をめぐって 渡邊 徳明
3. 12世紀オイル語文学における「信義」 高名 康文
4. 『バルチヴァール』における *triuwe* の多様性 松原 文
5. ミンネ歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデにおける *triuwe* 伊藤 亮平

シンポジウム IV (10:00~13:00) D 会場 (E402 教室)

〈かけがえがない〉とはどういうことか？

—近現代ドイツ語圏文学における交換(不)可能性の主題

Was die Dinge wert sind?

— Problematisierungen der Ersetzbarkeit und Unersetzbarkeit

司会：由比 俊行

1. クライスト『拾い子』における〈交換／代理〉の諸相 由比 俊行
2. シュティフターの『アプディアス』における〈かけがえのない〉存在
—「等価／不等価交換」の観点から 藤原 美沙
3. 聖槍としての貨幣
—ジンメルの貨幣論における「高貴性」の概念について 宇和川 雄
4. 身体を経済化させるものとしての言説
—E. イェリネク『動物について』 福岡 麻子
5. かけがえのない自己と交換可能な臓器
—ダーヴィット・ヴァーグナー『生命』について 熊谷 哲哉

ポスター発表 (13:00~14:30) H 会場 (E203 教室)

(ポスターは期間中を通じて掲示されています)

ビルダーボーゲン作品の世界 —ブッシュとメッゲンドルファー

酒井 友里・宇佐美幸彦

母語による聖書の是非

—聖書翻訳から考える三言語の中のルクセンブルク語

木戸 紗織

ポスター発表 (13:00~14:30) I 会場 (E201 教室)

(ポスターは期間中を通じて掲示されています)

Der Gemeinsame Europäische Referenzrahmen und der Deutschunterricht in Japan

— eine kritische Bestandsaufnahme

Maria Gabriela Schmidt / Alexander Imig

電子板書を導入したプレゼン型ドイツ語授業モデル

山崎明日香

ブース発表 I (14:00~15:30) F 会場 (E205 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

「光線」と「闇線」のディスクール ―ゲーテ色彩論における実験の再評価

Diskurs vom Licht und Finsternis. Wiederentdeckung der Goetheschen

Farbenexperimente

糸川麻里生・Olaf Müller

ブース発表 II (14:00~15:30) G 会場 (E204 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

第一次世界大戦とエキゾチズム

―シュニッツラー、ロート、ムージルが描く異郷(国)の女性

徳永菜摘野・依田 哲朗・宮下みなみ

口頭発表：文学 I (14:30~17:05) A 会場 (E601 教室)

司会：津田 保夫・木野 光司

1. 『歌』から『指環』へのハーゲン像の変化 野内 清香
2. 『恋愛禁制』における社会批判 ―ワーグナーとハインリヒ・ラウベ 加藤 恵哉
3. ヴィーラントのシェイクスピア翻訳におけるテキストへの介入について 菅 由紀子
4. 19世紀の伝説集に見るヤーコプ・グリム『ドイツ神話学』の反響 馬場 綾香

口頭発表：文学 II (14:30~16:25) B 会場 (E602 教室)

司会：孟 真理・山本 佳樹

1. 予見的批評とミメシス ―フリードリヒ・シュレーゲルの詩学における追構成の原理 胡屋 武志
2. アルフレート・デーブリーエン『たんぼぼ殺し』における狂気表象について 籠 碧

3. 文学における瞬間と永遠 —ピカートのヘーベル解釈を手掛かりに
石井 亮治

口頭発表：文学 III / 語学 I (14:30~17:05) C会場 (E603 教室)

司会：田村 和彦・増本 浩子

1. 朗読・アクション・テキスト
—トーマス・クリングの詩作における伝達のストラテジー 林 志津江
2. ポストメディアウム状況における文学
—セリーム・エツドガンの二つのメディア小説について 林 崙 伸二
3. Vom Klang der Sinn oder vom Sinn der Klang. Zur performativen Komik lyrischer
Begriffsarbeit Claus Telge
4. Deutsche und japanische Substantivzusammensetzungen im Vergleich
Simon Oertle

口頭発表：語学 II (14:30~17:05) D会場 (E402 教室)

司会：宮下 博幸・吉村 淳一

1. 談話標識 Weißt du was? に関する歴史語用論的考察
—説教集, 戯曲, 小説, 映画における話しことばに注目して 佐藤 恵
2. ドイツ語の完了助動詞選択 藤井 俊吾
3. ドイツ語形容詞 egal における総称性 —与格の生起をめぐって
井口 真一
4. 主語と文域 —二重判断・単純判断の視点から 藤縄 康弘

口頭発表：ドイツ語教育／文化・社会 (14:30～17:05) E会場 (E403教室)

司会：羽根田知子・福岡 麻子

1. ドイツ語母語話者・学習者間の多人数インタラクション
—「聞き返し」と発話の協働構築プロセス 星井 牧子
2. ウィーン工房の初期デザイン
—異質なものの文化的摂取，混交，排除の一例として 高井 絹子
3. アドルフにおけるハイネ像
—「知識人」としての自己理解という観点から 橋本 紘樹
4. ナチズムは「アジア的」行為か
—歴史家論争 30 年，アジアからの再考の試み 渡辺 将尚

ブース発表 III (16:00～17:30) F会場 (E205教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

Das Image des Fremdsprachenunterrichts bei Deutschlernenden
am Beginn des ersten Studienjahres

Carsten Waychert

ブース発表 IV (16:00～17:30) G会場 (E204教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

ICT 総合ドイツ語学習環境について —海外研修での活用と多言語化の試み

川村 和宏・竹内 拓史・松崎 裕人

懇親会 (18:00～20:00)

会場：100周年記念会館ホール

会費：6,000円 (学生・常勤職のない会員は4,000円)

第2日 10月23日(日)

シンポジウム V (10:00~13:00) A 会場 (E601 教室)

Architektur als Gestaltungsprinzip des Imaginären in Literatur und Kunst

Moderator: Thomas Pekar

1. Der (Un-)Wille zur Architektur. Kōjin Karatani über Wittgenstein und Christopher Alexander Walter Ruprechter
2. Imaginierter Glanz und flüchtiges Zuhause. Speisesaal in der Großstadtliteratur des 20. Jahrhunderts Kikuko Kashiwagi
3. Architektonische Macht im Nationalsozialismus Thomas Pekar
4. Weinen und Onanieren im Keller. Aspekte eines architektonischen-poetologischen Chronotopos in der Gegenwartsliteratur Hiroshi Yamamoto
5. Architekturen der Transparenz. Glas als Material einer urbanen Moderne Michael Wetzel

シンポジウム VI (10:00~13:00) B 会場 (E602 教室)

心態詞はなぜ使われるのか？

— 心態詞の出現する状況と認知

Warum verwendet man Modalpartikeln?

— Situationen und Kognition

司会: 田中 慎

1. 心態詞の義務性をめぐって — 実証的アプローチ 大藪 正彦
2. 心態詞の感情伝達機能 — 心態詞とその生起環境の分析 宮下 博幸
3. 「驚き」に関する心態詞と終助詞の比較 — 心を読ませるための手がかり 岡本 順治

シンポジウム VII (10:00~13:00) C 会場 (E603 教室)

時代を映す鏡としての雑誌

—18 世紀から 20 世紀の女性・家庭雑誌に表われた時代の精神を辿る

Zeitschriften im Spiegel des Zeitgeistes

— Die Frauen- und Familienzeitschriften vom 18. bis zum 20. Jahrhundert

司会：桑原ヒサ子

1. 貞節と理性 — マリアンネ・エールマン『アマーリエの休息时间』が提示する女性の自己陶冶 北原 寛子
2. 『ガルテンラウベ』 — 大衆化する活字メディアとその「政治性」 竹田 和子
3. 『ナチ女性展望』 *NS Frauen Warte* — 女性による女性のための雑誌 桑原ヒサ子
4. フォーラムとしての家庭欄
— 東ドイツの人気週刊誌『Wochenpost』にみる女性像の変遷 重野 純子
5. 非政治性の政治性
— 戦後西ドイツにおける女性雑誌 *Constanze* の誌面分析 横山 香

シンポジウム VIII (10:00~13:00) D 会場 (E402 教室)

「人殺しと気狂いたち」の饗宴

あるいは戦後オーストリア文学の深層

Das Symposion unter Mördern und Irren

oder die Tiefe der österreichischen Nachkriegsliteratur

司会：前田 佳一

1. オーストリアにおける「ドイツ国民叙事詩」研究
— 『ニーベルンゲンの歌』の「オーストリア性」 山本 潤
2. 「この時代」の文化批判 — ムージルの「カカーニエン」と
アウストロ・ファシズム 桂 元嗣
3. 訪れない「戦後」 — L. W. ロホワンスキーによる
オーストリア文学再編の試み 日名 淳裕

4. ハイミート・フォン・ドールナーにおける「間接的なもの」の詩学
前田 佳一

閉会の挨拶（13:05～13:10） A 会場（E601 教室）

担当校代表 宇佐美 幸彦

研究発表会期間中，上記のプログラムに加えて，書店・出版社等による書籍展示が行われます。（書籍展示会場：E301・E302・E303 教室）